

昭和52年 5月25日 第3種郵便物認可 令和4年1月10日発行 (毎月1回10日発行)



世界の円満  
人類の福祉

THE ENPUKU

1月

2022 No.496



世界法民連帯 円福友の会

## 円福友の会入会のすすめ

1食1円のSABA運動で世界の平和に尽くしましょう。

SABAとは、禅寺の僧堂でお食事の前に、七粒ほどのご飯をお膳のすみに取っておき、後で小鳥に施す「生飯(さば)」というお作法のことです。

これを日本の皆さんの1食1円のSABAとして、アジアの貧しい国々の子ども達のために学校建築(教育)や、井戸やトイレの設置(環境衛生向上)を支援する、国際ボランティア資金の運動です。1食1円ならどなたにもできます。塵も積もれば山となるように、皆さんの御協力をお願いする大きな愛の運動です。(この運動は、特定の政党や宗教や思想に関係のない、非営利の国民運動です。)

綴じ込みの郵便振替用紙を使い年会費やSABA運動等の協力金をお送りください。お送りいただいた皆様には毎月『圓福』と『おもいやり』をお送りし、円福友の会の活動と円福寺愛育園の子どもたちの様子をご報告いたします。

## 表紙の写真

表紙の写真は、プラティープ財団の教育里親事業部部長を務めるサーイルン・ラックサーチョープさんです。

本文(8P)をご覧ください。

サーイルン・ラックサーチョープさんからのメールを12月号で紹介しました。きっとプラティープさんと共に、40年以上もスラムの子どもたちのために働いておられると思いました。

プラティープさんを中心として大勢のスタッフの力でスラムが改善されています。

## 1月号の内容

にこにこ法話 善い縁と善い環境に生きよう	1 p
プラティープ財団二〇二一年活動報告	3 p
ドゥアン・プラティープ財団の40年—スラムの天使の歩みと闘い(その11)	7 p
養育随想 心の養育 どの施設でもできる優れた養育者はいない	10 p
大心 受処転役	13 p



あけましておめでとうございませう。  
今年も円福友の会の発展と共に、皆さまのご家庭の幸せを  
念じます。

早くコロナが収束して欲しいです。

そうしたら、カン

ボジアへ行き、皆

様のご支援による

校舎建設や井戸の設置の様子を視察し

てご報告し、活動を発展させます。

善い縁と善い環境に生きよう

です。

立派な人のそばで 懸命に学んでい

ると 気づかないうちに 自分も立派

な人になってゆくものです』「正法眼

蔵随聞記 巻五」

昔どこかで読んで（聞いて）探して

いた言葉でした。

随聞記に書かれ

た場所が分かりま

したので、原文に

あたってみました。（岩波文庫「正法

眼蔵随聞記」一二二頁）

一四の「人の心本より善悪なし。善

悪は縁に随て起る。」に続く一五です。

その部分を抜粋します。

『（人の心は他人の言葉に随う」と

いう文に続いて）然あれば学人たとひ

道心なくとも、良人に近づき善縁にあ

曹洞宗の宗報と共に送られてくる

「てらスクール」12月号に次の文が載っ

ていました。（13 p）

『霧の中を歩いてゆくと いつのま

にか 衣がしつとりと うるおうもの

## 法話ニコニコ

ふて、同じ事をいくたびも聞<sup>き</sup>見るべきなり。この言<sup>こと</sup>ば一度聞<sup>き</sup>たらば重<sup>かさね</sup>て聞<sup>き</sup>べからずと思<sup>おも</sup>ふことなかれ。道<sup>どう</sup>心<sup>しん</sup>一度起<sup>おこ</sup>したる人も、同じ事なれども聞<sup>き</sup>たたびごとくに心<sup>こころ</sup>みがゝれて、いよいよ精<sup>せい</sup>進<sup>しん</sup>するなり。亦<sup>また</sup>無<sup>む</sup>道<sup>だう</sup>心<sup>しん</sup>の人も、一度二度こそつれなくとも、度<sup>たび</sup>度<sup>たび</sup>聞<sup>き</sup>ぬれば霧<sup>む</sup>露<sup>ろう</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に行<sup>い</sup>が如<sup>ごと</sup>くいつぬるゝとも覺<sup>おぼ</sup>へざれども自然<sup>じぜん</sup>に衣<sup>い</sup>のうるほふが如<sup>ごと</sup>くに、良<sup>よ</sup>人<sup>にん</sup>の言<sup>こと</sup>ばをいくたびも聞<sup>き</sup>けば、自然<sup>じぜん</sup>にはづる心<sup>こころ</sup>も起<sup>おこ</sup>り実<sup>まこと</sup>の道<sup>だう</sup>心<sup>しん</sup>も起<sup>おこ</sup>るなり。』

人の心に善<sup>ぜん</sup>悪<sup>あく</sup>はありません。善<sup>ぜん</sup>悪<sup>あく</sup>の心<sup>こころ</sup>は縁<sup>えん</sup>（その人の周りの人や環境<sup>かんげい</sup>）に従<sup>したが</sup>って起<sup>おこ</sup>きるのです。善<sup>ぜん</sup>い縁<sup>えん</sup>と善<sup>ぜん</sup>い環<sup>かん</sup>境<sup>けい</sup>に生<sup>な</sup>活<sup>くわつ</sup>すれば、自然<sup>じぜん</sup>と善<sup>ぜん</sup>い心<sup>こころ</sup>が起<sup>おこ</sup>り、悪<sup>あく</sup>い縁<sup>えん</sup>と悪<sup>あく</sup>い環<sup>かん</sup>境<sup>けい</sup>に生<sup>な</sup>活<sup>くわつ</sup>すれば、自然<sup>じぜん</sup>と悪<sup>あく</sup>い心<sup>こころ</sup>が起<sup>おこ</sup>きてしまうのです。

愛<sup>あい</sup>育<sup>いく</sup>園<sup>えん</sup>の職<sup>しやく</sup>員<sup>いん</sup>も子<sup>こ</sup>どもたちも、円<sup>えん</sup>福<sup>ふく</sup>寺<sup>じ</sup>愛<sup>あい</sup>育<sup>いく</sup>園<sup>えん</sup>という善<sup>ぜん</sup>縁<sup>えん</sup>に随<sup>したが</sup>って、朝<sup>あさ</sup>早<sup>はや</sup>く起<sup>おこ</sup>きておま<sup>ま</sup>いりをし、みんなで一緒<sup>いっしょ</sup>にご飯<sup>いひ</sup>を食<sup>く</sup>べ、最<sup>さい</sup>高<sup>こう</sup>の行<sup>ぎやう</sup>事<sup>じ</sup>をし、「子<sup>こ</sup>どもたちの幸<sup>さい</sup>せのため」に心<sup>こころ</sup>身<sup>み</sup>をなげうって行<sup>ぎやう</sup>道<sup>だう</sup>すれば、いつの間<sup>ま</sup>にか衣<sup>い</sup>がしつとりとうるおうように、職<sup>しやく</sup>員<sup>いん</sup>も子<sup>こ</sup>どもも立<sup>た</sup>派<sup>は</sup>な人<sup>ひと</sup>になるでしょう。そのよう<sup>よう</sup>に、毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>を努<sup>ゆめ</sup>力<sup>りき</sup>精<sup>せい</sup>進<sup>しん</sup>したいと思<sup>おも</sup>います。

新<sup>しん</sup>年<sup>ねん</sup>にあたり、円<sup>えん</sup>福<sup>ふく</sup>寺<sup>じ</sup>愛<sup>あい</sup>育<sup>いく</sup>園<sup>えん</sup>や円<sup>えん</sup>福<sup>ふく</sup>友<sup>ゆう</sup>の会<sup>かい</sup>のご縁<sup>えん</sup>の中<sup>ちゆう</sup>で、いよいよ精<sup>せい</sup>進<sup>しん</sup>するこ<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>お誓<sup>ちか</sup>いして、ご挨拶<sup>あいさつ</sup>といたします。

円<sup>えん</sup>福<sup>ふく</sup>友<sup>ゆう</sup>の会<sup>かい</sup>会<sup>かい</sup>長<sup>ちやう</sup>

藤<sup>とう</sup>本<sup>ほん</sup>光<sup>こう</sup>世<sup>せい</sup> 台<sup>たい</sup>掌<sup>しやう</sup>